多元的現実論の視点からメディアの信頼性への問い
― A. シュッツのドン・キホーテ論を導き手に―

小 林　義 寛*

はじめに

ネット上でのいわゆる「マスゴミ」批判だけに限らず、メディアの信頼性の低下は、さまざまな世論調査などで報告されている。日本におけるメディアへの信頼も、世界的にみればまだまだ高いとはいえ、低下してきていることが指摘される。[(1)] この小論の目的は、日本におけるメディアの信頼性の低下に関して、いくつかの事例を参照し、それを考察することにより、メディアの信頼性に関して「問い」を発することにある。その際、参照する事例は、筆者自身の別稿（小林　2015）で考察したものを用いる。

参照する事例はインターネット空間での事例であるが、それは、伊藤守を研究代表とする共同研究が[(2)]基盤にある。共同研究において筆者たちのワーキング・グループはインターネットを前提にニュース・メディアを考察することにあった。そのため、ウェアラブルなツールを用いて情報を送受信できる状況下において、「遍在するニュース」に関してアプローチを試みた。この小論での考察も、ウェアラブルなツールによる情報の送受信が可能な状況における「遍在するニュース」という視点は共有し、そのような状況において信頼性への「問い」を発する。

また、詳細は小林（2015）を参照してもらうとして、そこで提出した論点には、人類学における議論に基づきながら、あらかじめ問われることなく前提とされている「公共性」や「個人」に対する問題提起がある。わたしたちは徹頭徹尾「個人」であるわけではないし、いつでもどこでも「公共性」を意識しているわけではない。けれども、時にすぐれて、文字通り西洋近代的な「個人」として立ち現れることもあるし、「公衆」であったりすることもある。それは、ド・セルトー的に「民衆の戦術」（de Certeau 1980=1987）ともいえる様相であろう。いいかえれば、専門家ではない（lay）人びとのアンビバレントでアモルフな立ち現れが単純に一元化され、表象化されていることへの疑義である。この小論でもその視点は共有されている。そのうえで、この小論ではそこにラッシュとウィンらの議論を接ぎ木している（Lash & Wynne　1996 および伊藤　2013）。すなわち、ギデンズらのいうような再帰性への疑義である。エスタブリッシュされ、制度化されたプロフェッショナルに対する信頼が、不信が際立って表面的にみられないし、行動に現れていないとはいえ、単純に存立しているわけではない。揺蕩うようにアモルフでアンビバレントなある側面を非再帰的な信頼と同一視し、同様のある側面を不安に対する選択の結果としての再帰的過程と位置づける、それを初期近代と後期近代との相違とする議論への問題提起でもある。

以上のような前提を基に、以下、まず簡単に事例をみておこう。その後、シュッツによる多元的現実に関する考察を参照し、その視点から事例を考察することにする。そして、その考察に基づい

---

*こばやし　よしひろ　日本大学法学部新聞学科　教授

て、メディアの信頼性に対する「問い」を提起しよう。

1　3つの事例

ここで取り上げる事例は、いずれもネット上で展開されたものである。2種類は2008年に発生した「秋葉原無差別殺傷事件」をめぐる事例であり、残る1つは2011年のテレビ・アニメーションの再放映・再送信中止の事例である。あえて、「秋葉原無差別殺傷事件」一年後の事例からみておこう。その前に、その事件の概要を簡単にまとめておくと、以下のようになる。

事件発生は2008年6月8日の昼食時である。東京の秋葉原で、犯人は歩行者天国にトラックで突入し、5人をはね、通行人ら12人にナイフで斬りつけた。トラックによる死者3名、負傷者2名、ナイフによって4名が死亡、8名が負傷した。犯人は駆けつけた警察官によって現行犯逮捕されたが、事件の様相は、すぐにテレビで速報が流れ、ワイドショーも含め、随時報じられていった。番組によっては、現場の監視カメラ映像も流された。当時テレビをみていた人間にとっては衝撃的な事件であった、といってよいだろう。

【一年後の秋葉原】

事件から1年後、「マスコミ」が再び秋葉原に集まった。当日朝から、テレビでは事件を振り返りながら、1年後の秋葉原の様子を中継した。その「マスコミ」の取材に対して、既存メディアでは顕在化しなかった議論がネット上で展開された。それは、報道機関の取材姿勢に関わる批判であり、そのためもあってか、ネットにアクセスし、それらのブログなりスレッドなりを巡回しない限り、筆者自身もそうであったが、おそらく検索の結果偶然にしか出会うことはないだろう。

おびただしい数の批判が記者やレポーターの行為を写真で示しながらなされているが、写真等は除外し、そのうちからひとつのブログを以下に引用する。

> 1年前のテレ朝は「献花スポット」全体をいじって撮影してたけど、この日のいろんなマスコミはソフマップ本館前の献花の中から、メッセージカード付きの花を探して、まわりの花を手で押さえて撮影したり、下の方から別のカード付きの花を掘り出したりしてた（どこのTV・媒体なのかは未確認）。
> （中略）
> （上記に対するコメント）
> 5299：
> 夕方6時
> TVでは局の雇ったコスプレ劇団員の献花シーンが！
> 5300：
> 真性のクズだな
> マスゴミとしてですらなく人としてやっちゃいけないことだろ
> 墓荒らしと同じ、死んで詫びろ
> 5301：
> こんなことするマスゴミに1年前事件現場で写メール撮ってた連中を避難する資格なんてねえ

よ
（中略）
5308：
遺された人の気持ち踏み躙る行為だとわかった上でやってるのか？
ジャーナリスト（笑）なら何しても許されると思ってんのか？
理解できない
（中略）
5321：
なんでこいつらが加藤に殺されなかったのかな
なんで俺のダチなんだろうか
こいつらカスゴミが死ねばよかったのに
（中略）
5386：
今日秋葉のソフマップ前いったらマスゴミ達がいたからちゃんと黙祷できなかったよ…
（後略）（http://yutori2ch.blog67.fc2.com/blog-entry-394.html（2013 年 8 月現在））

慰霊の花に対して、取材陣が手を加えている。それに対して、怒りの反応であり、「マスコミ」の取材のあり方への疑問の提示というよりも、「死者への冒涜」、「マスゴミ」等という語を使用しながらの、かなり強い批判である。

おそらく「ジャーナリスト」あるいはカメラマンやレポーターら取材する側の行為としては、ごく当たり前の行為だったのかもしれない。カメラ写りがよいように、テレビ映えするように、視聴者にみえやすくするように、などの判断だったのだろう。「プロフェッショナル」としては、至極自明で当然の行為であったかもしれない。しかし、取材する側の、そのような自然的態度こそがここでは批判の対象になっている。

思うに、このような状況はこれまでにもあっただろう。けれども、今日の誰でもが送受信可能な情報環境下においては、これまで批判はあったとしても公に知られることはなかったことが、ネット上で誰でもその状況を顕在化し、公開することが可能になった。しかも、ウェアラブルなツールで静止画や動画さえも伴いながら公開され、衆目にさらすことが可能になった。結果として、取材する側のこのような行為をみたとき、レポーターやキャスターの死者への悔やみや哀悼の意は、空々しく非礼で、人間性のかけらもないような、表面的で形式的な言葉でしかなく、単なる偽善や欺瞞にさえ感じられてしまう。

【事件当日の「野次馬」批判】

2008 年 6 月 8 日は日曜日であった。秋葉原は歩行者天国であり、そこで事件が発生した。テレビでは、各局とも映像を交えて多くの状況が伝えられた。その際には、現場映像として、ケータイの映像も使用されていた。ネット上にも、事件自体や事件後の現場映像があちらこちらにあがっていた。それらには、テレビからのものもあれば、秋葉原の監視カメラ、自らのケータイでの撮影のものもあった。もっとも、そもそもテレビの映像自体に現場に居合わせた者のケータイから提供さ

れたものもあったので、筆者が閲覧した映像も、元はケータイだったのかもしれない。

そのケータイでの撮影に関して、事件後すぐに非難の反応が出現するが、週刊誌各誌で取り上げられてからは、ネット上でも大きく盛り上がりをみせた。そのいくつかを以下、簡単にみておこう。

「あなたが…好きです（はぁと）」2008年6月8日のブログ「秋葉原通り魔事件」では、かなり冷静に著者が遭遇した事件の経緯を写真入りで報告している（http://plaza.rakuten.co.jp/akibasuki/diary/200806080000/（2013年8月現在））。それへのコメントとして

「悲しい」
本当に悲しく不幸な出来事。。。（ママ）
加害者に対する怒りはもちろんの事、
テレビを見ていて、あの惨劇の中、写メを撮っていたり、
ニヤついた顔でテレビに写（ママ）ろうとしていた人がたくさんいた事が
同じ人間として情けなく、悲しかった
被害者の方々とそのご家族に、心からお悔やみ申し上げます。

J-CASTでは、「秋葉原事件の被害者撮影　モラル論議が巻き起こる」と題して、週刊誌各誌でのケータイで撮影していた「野次馬」に対する批判をまとめ、それへの反応も掲載している（http://www.j-cast.com/2008/06/12021731.html（2013年8月現在））。そこからは、「私は不謹慎なのでしょうか？」という問いかけや、撮影した者の困惑した様相がかいまみられるし、ケータイによる撮影の意義をみいだすこともできる。

2chのようなスレッドとしては、たとえば「【秋葉原事件】「なんなんだよおまえら…」ヤジ馬、殺された人達をケータイ撮影しまくり。サイトに掲載し「高揚感」…モラル論議に★9」（http://mamono.2ch.net/test/read.cgi/newsplus/1213365404/l50（2013年8月現在））等をみると、撮影者に対する「道徳的」ともいえる非難が数多く寄せられている。しかし、そこにも撮影者を擁護する声がみられる。

「なんでジャーナリストはよくて／一般人はだめなんだ？意味がわからない」（36）
撮影者を非難するマスコミに対して「マスコミが嫌がるなよWWWW（ママ）／オマエらいつも撮りまくってるだろおかまいなしにWWWW（ママ）」（97）など

176：
聖火リレーのときだって、マスコミの撮ったもんよりも一般人の撮ったもの（ママ）のがずっと価値があると思った。
アキバで写してた連中も、ほとんどは「悲惨な事件現場の状況」を写してんだと思うぞ。
そして実際にマスコミが駆け付ける前の状況が記録されただろ。
俺は撮ってた連中を否定できないな。
自分なら撮らないけどね。

全体的にみれば非難する声は大きいのだが、擁護する意見や困惑している様子を考えると、それほど単純ではないように思われる。たとえば、Cinemapost.net では元編集者が映画批評のなかで「『戦場のフォトグラファー　ジェームズ・ナクトウェイの世界』フォトジャーナリズムと野次馬の写メは何が違うのか」と挑発的に題して、次のような問いかけをおこなう。

（前略）
僕は報道カメラマンや戦場カメラマンという職業が嫌いだ。この世でもっとも下劣な職業の１つだと思っている。人が悲しんだり、怒ったり、苦しんだりする様をカメラに収める職業というのは上品とはいえないし、下品で邪悪ですらあると感じている。少なくても善ではない。
特に秋葉原連続殺傷事件を期にして、その思いは強くなった気がする。僕はノンビリしてるし、実家暮らしという命綱付きとはいえ、ポジション的には暴発した（ママ）トモ加藤に非常に近い。
その事件の被害者・加害者をフォーカスするカメラマンを見るにつけ、野次馬が携帯でパシャパシャと写メを撮るのとどう違うのか？専業カメラマンと野次馬はどこが違ってどこら辺に境目があるのか、まったく分からなくなってしまった。
もしカメラマンが「真実の報道」を建前に写真を撮るなら、携帯でパシャパシャ撮っている人間との差異を、僕にでも分かるように表現すべきだし、そうする義務や責任があるんじゃないかと思う。少なくともニュースを見る限り、僕にはどうしても差異が理解できなかった。これは日本のジャーナリズムの貧困に由来するものだろうか？
残念ながら僕には分からない。
（後略）（http://cinemapost.net/archives/2650（2013 年 8 月現在））

仮に、ジャーナリストが事件現場に居合わせたとしよう。彼ら彼女らは積極的にシャッターを切ることはなかったのだろうか。むしろ、現状を伝えるべく、居合わせた者として事件の状況を伝えるべく行動したのではないか。

また、その際、彼ら彼女らは、職業上の使命としてだけ、そして、その職業倫理に乗っ取ってだけで行動するだろうか。そこに好奇心や興味本位が決してない、とはいいきれまい。突然に生じた非日常的な出来事に際して、彼ら彼女らの精神構造に「ニュースになる」という価値観が生じるだろう。それは、日常の自明性のなかのフレームでは理解できない、特異な現象への興味関心ゆえではないのだろうか。とすれば、なにゆえ「野次馬」が好奇心や興味本位などとして批判されなければならないのだろうか。

さらに、「野次馬」がただの傍観者であったことが問題視されるのだが、はたして「ジャーナリスト」なら傍観者とはならないで行動するといえるのだろうか。それに関しては、たとえば 1985 年の豊田商事会長刺殺事件を思い起こしてみれば、はなはだ疑問に感じざるをえない。突然の出来事に対して、ただの傍観者でしかなかった「ジャーナリスト」。というより、むしろただうろたえ、呆然として、おそらくはその職業上の使命も、そして職業倫理どころか一般的な倫理さえも忘れ果てたかのようにたたずむ姿を思い起こせば、容易に想像できる。それにもかかわらず、「野次馬」とされた人びとの行為だけが断罪されるのはなぜなのか。

わたしたちは、ウェアラブルなツールを介して、情報の送受信可能な情報環境下にある。この情

報環境下にあって、これらツールのインターフェースが身体化されていればされているほど、状況の衝撃が身体化された行為を誘発するだろう。たとえ、情報ツールがそれほど身体化されていないとしても、非日常的なあるいは自明でないような出来事に際して、日常のパターン化された行為様式が発動されることもよくみられる。日常ではあまりみられないことに対して思わず日常的な反応をしてしまったり、みられないからこそ――たとえば季節はずれの桜にカメラを向けてしまうように、カメラを向けてしまったりしたのではないだろうか。

たしかに、ただ面白半分にケータイを使用していた者もいただろう。けれども、それらすべてを十把一絡げに「野次馬」で括って批判することには大きな違和感があるし、たとえ「野次馬」的な行為であったとしても、そこに戦術的な意味をみいだすことは可能である。自らの所持しているツールを、状況に際して使用する。それは、なにも意味がないような行為や「不謹慎」にもみえる行為かもしれぬが、それだからこそ、ある種の戦術的な意味があるともいえる。

どちらにしても、それらの映像がブログや sns などを通じてネット上に流通する。そうして、状況の衝撃は多くのネット・ユーザーたちを介して流通してゆく。「ジャーナリスト」のような専門家でない（lay）者の手による「ニュース」の流通、いいかえれば、その場に居合わせた者たちが自ら所有しているツールを介して、情報を流用（appropriation）している、といえる。それは、これまでは「ジャーナリスト」の職業的な特権とでもいえるような行為が、職業上の使命も職業倫理もないかもしれないが、日常生活の延長上の過程のなかで、その都度その都度、時どきに応じた、一貫性のない行為において、展開されている。それこそ、日常生活の戦術といえるだろう。この場合、ある意味では、「ジャーナリスト」の占有状態がそれによって破られたに過ぎない。しかし、それが公的な場において、疑義の対象となる。横断性をもった私的なブリコラージュの行為の流出は、公的な情報発信の占有者には脅威でもありえよう（小田　2008 参照）。だが、わたしたちは日常的にそれらの情報ツールを手にし、いつでも使用可能な状態におかれているのだ。

【銀魂再放映・再送信中止】

テレビ東京は、2011 年 10 月 31 日に放送したアニメーション番組『銀魂』を、11 月 15、18 日に子会社の CS チャンネル「AT-X」での再放送を中止した。

このことに関して、ネットではアニメファンを中心にさまざまな憶測を呼んだ。震災にかかわる AC の公共広告のパロディがあることが中止の原因である、食物を粗末に扱っていることが原因である、ある国会議員を彷彿させるキャラクターが問題である、などいくつもの説が流通した。多くの議論のなかで有力視されていたのが国会議員を彷彿させるキャラクターのパロディ部分であり、当議員本人か事務所から抗議なり問い合わせなりがあったことが原因と噂されたが、その真偽は公式には明らかにされていない。

なお、『銀魂』自体は、集英社の『週刊少年ジャンプ』連載マンガであり、ジャンプ・コミックスとして単行本も発売されている。当該アニメーションの回も、ほぼ原作通りであり、その際には発売中止も回収騒ぎも起きていない。

問題は、テレビを含め既存の「報道機関」は全くこの話題に触れなかった（『毎日新聞』だけが放映中止の事実を一度小さく報じた）ことにある。「くだらないギャグアニメ」であるが、ここには政治権力とメディアとの関係をめぐる重要な問題がはらんでいる。議員事務所の問い合わせが事

実であるなら、メディアへの政治の不当な介入でもある。たとえ、その事実がないにしても、政治問題や社会問題ではないにしても、政治家の関与が疑われたこと自体は事実である。それであるのに、どのメディアも、黙して語らないのはなぜだろうか。

社会問題や政治問題なら各社挙ってキャンペーンさえ張るかもしれない。しかし、「おこさま」の、ギャグ・アニメである。そこに、既存メディアのダブル・スタンダードな姿が透けてみえてしまうように感じられる。大上段な出来事への軋轢は大きな関心を呼ぶために困難がつきまとうが、取るに足りないものの封殺は誰の関心もないうちに広がりゆく。表現の自由やメディアの倫理性に対して、筒井哲也がマンガで描く『有害都市』（集英社）の状況は[(3)]現在のわたしたちを包んでいるのかもしれない。

2　シュッツの多元的現実論の視点から

2-1　多元的現実をめぐるシュッツの理解

上記の事例を、シュッツによる多元的現実に対する思考を基に考えてみよう。それに際し、まずシュッツの多元的現実論を簡単にパラフレーズするが、事例との関係も含め、シュッツのドン・キホーテをめぐる議論（Schutz　1964=1991：pp.191-220）が理解しやすいと思われる。そこで、彼のドン・キホーテに関する考察に即して事例を考察するが、シュッツは、ドン・キホーテを考察するに際し、ウィリアム・ジェームズの多元的現実に関する議論に依拠する。そこで、ジャームズの議論を、以下、シュッツに従って簡単にまとめておこう。

シュッツによれば、ジェームズの現実の秩序に関する理論は次のようにまとめられる（Schutz 1964=1991：pp.191-192）。

現実・非現実の区別全体、信念・不信・懐疑に関する心理学全体は２つの精神的事実に基礎づけられる。それは、①わたしたちが同一の対象に関して多様な異なった思考をする傾向がある、②異なった思考の、どの思考に従い、どの思考を等閑視するかの選択が可能である、という事実である。そのような精神的事実からすれば、あらゆる現実の本源は主観的であり、わたしたち自身である、といえる。そのため、無数の多様な現実の秩序が存在し、その各々がそれ自身特有の、他と区別される存在様式をもっていることになる。ジェームズはそれら各々の現実の秩序を「下位宇宙（サブ・ユニヴァース）」と呼んだ。それらには、たとえば、至高の現実である、共通感覚（コモンセンス）によって経験される諸感覚や物理的「事物」の世界があるし、科学の世界、理念的諸関係の世界、神話と宗教の世界、「部族の偶像（イドラ）」の世界、超自然のさまざまな世界、個人的意見の多様な世界、狂気や奇行の世界がある。わたしたちの思考の対象はこれらの少なくとも１つの世界に関係づけられており、そのそれぞれの世界は、注意が向けられている間はその世界独特の仕方に即して現実なのである。そして、わたしたちの精神と世界との関係も、精神と衝突する強力な関係が不在であるならば、ある対象を現実とするのに十分である。

シュッツは、このようなジェームズの議論を基にドン・キホーテの諸世界を考察するが、この小論の目的はシュッツ論でもドン・キホーテ論でもないので、次に、彼のドン・キホーテに関する考察を上記の事例と合わせてみていこう。[(4)]

2-2 多元的現実とドン・キホーテおよび事例

まず、セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』の世界を簡単に概括しておこう。その世界における現実は大きく３つあげられる。それは、①ドン・キホーテの私的な世界として、魔法と怪物の存在する騎士の世界、②酒場や宿屋などの他の人びとが日々の生活を送っている至高の現実である常識の世界、③ドン・キホーテに従う従者でもあり、至高の現実を生きるサンチョ・パンサの世界、である。

一般的に理解できることは、ドン・キホーテの生きる世界はゲーム『ダンジョン＆ドラゴン』にみられるような世界であり、ドン・キホーテは騎士として数多の英雄的行為を行ったことになっている。しかし、これは他の世上の人々には理解できない狂気の世界である。その点では、サンチョ・パンサも、ドン・キホーテに従いつつも、彼の世界を信じず、他の多くの人びとと同様の至高の現実を生きている。すなわち、ドン・キホーテの現実とサンチョ・パンサを含めた他の人びとの現実との間、いいかえれば、両者の自明な自然的態度の世界には乖離がある。ドン・キホーテにとっては自明であっても、他の人びとにとっては自明ではないし、他の人びとにとっては自明なことがドン・キホーテにとっては自明ではない。このことは、先の事例にもみられる。記者、取材する側、メディアにとって自明で当たり前の行為が他の「普通」の人びと、オーディエンスにとっては自明でない。つまり、両者の現実には乖離がある。そして、そのメディアの現実とオーディエンスの現実との齟齬がオーディエンスからのメディアの信頼性に対する不信となっている。それがたとえば先の「マスゴミ」批判のような主張になるのだろう。

その上で、ここでサンチョ・パンサに焦点をあててみよう。

サンチョ・パンサは、基本的には至高の現実を生きていて、ドン・キホーテを信じていない。しかし、ドン・キホーテとの冒険では彼に従い、ドン・キホーテの世界であたかも彼の従者として彼を信じているかの如く、演じている。その意味では、サンチョ・パンサの位置は、ドン・キホーテと「普通」の人びととをつなぐ、コミュニケーターのようなものだ。彼は常に両者の間を行きつ戻りつしている。そこで、木馬にまたがり空中騎行をする章で、サンチョ・パンサの立ち位置が失われるような事態が生じる。それは、ドン・キホーテの従者として行動することで「普通」の人びとの現実から乖離している上で、ドン・キホーテからサンチョ・パンサが自分を全く信じていないことを突きつけられる場面である。サンチョにドンは「お前がいうことを自分に信じてほしいなら、自分の話もお前に信じてもらいたいものだ」とささやかれ、ドン・キホーテから不信を示される。結果、サンチョ・パンサの現実はドン・キホーテの現実とも齟齬を起こす。すなわち、サンチョ・パンサの現実は、ドン・キホーテの現実と「普通」の人びとの現実、その両者とも乖離することになる。ここで、もはやサンチョ・パンサはコミュニケーター足りえなくなる。彼は、両者からの信頼を失う。このことは、コミュニケーターとしてのジャーナリスト、記者、取材する側、メディアといったものの現実が、取材される側の現実とオーディエンスの現実、その両者と乖離していることと重なる。先の事例でいえば、メディアによる「野次馬」批判や放送中止に対するダブル・スタンダードな対応がこれにあたるだろう。その結果として、サンチョ・パンサのように両者からの信頼の喪失、とみることができる。

3　まとめ

シュッツの多元的現実論の視点からみたとき、信頼性の低下や喪失は、現実の乖離として考えることが可能である。ジャーナリスト、記者、取材する側、メディアといったような存在のもつ、自明で当たり前な、自然的態度の世界からなる現実と、その他の現実との乖離、齟齬が不信へとつながっている。そして、その現実の乖離はローカル・ノレッジとの乖離を意味する。すなわち、プロフェッショナルな知と専門家でない（lay）人びとによるローカルな知との乖離、である。それは、一般市民の有する再帰的プロセスへの視座の不在ともいえよう。

というのも、情報の送受信が可能な状況により多くのことが顕在化したが、現在のような情報環境でなかった状況下ではそのような事態はなかった、とはいえないだろう。単に、顕在化していなかっただけであり、それにもかかわらず、先に述べたように、それを単純に非再帰的な信頼と同一視し、信頼が存在していたと見紛っていたのではないだろうか。アンビバレントで、アモルフな、揺蕩うような人びとの有り様を単純に一枚岩でとらえてきた結果だろう。それは、たとえばマルチチュードともいえる蠢く人びとの運動を、簡単に60年や70年の運動と同一視したりする言説に如実に表れているように感じられる。その意味では、ラッシュやウィンがいうように、ローカル・ノレッジの捉え直しが必要とされる。そうして、公共領域における集合的な民衆知（公共知）の有する再帰性の意義を認識したうえで、「公共性」自体の問い直しをする必要があろう。すなわち、「近代」自体の問い返しである。それゆえ、「近代」そのものに依拠しているジャーナリズム、メディアの有り様を再考し、再構築する必要があるのかもしれない。信頼性は、単純な信頼性自体を脱構築することから確認し直す必要がある。

注

（1）　たとえば、2016年アメリカ大統領選挙の際のGallup社によるメディアの信頼性に関する調査結果（http://www.gallup.com/poll/195542/americans-trust-mass-media-sinks-new-low.aspx?g_source=Trust%20in%20Mass%20Media&g_medium=search&g_campaign=tiles）では、アメリカにおけるマス・メディアへの信頼性の低下傾向を経年で示し、2016年の急落をネットと大統領選による影響と指摘している。同様の指摘は、ワシントン・ポストやニューヨーク・タイムズなどにもみられ、「メディアの敗北」、「世論調査の敗北」ともいわれた。

「世界価値観調査」（http://www.worldvaluessurvey.org/wvs.jsp）では世界的な傾向に関する国際比較がおこなわれており、池田謙一（2016）や舞田敏彦（2015）を参照すると、欧米諸国におけるメディアの信頼性の低下傾向がわかる。

また、国際比較も含め、日本の傾向に関しては、公益財団法人新聞通信調査会2016年の「諸外国における対日メディア世論調査」および「第9回メディアに関する全国世論調査」（http://www.chosakai.a.jp/notification/index.html）があり、そこでは、第1回から第9回までの間で日本人のメディアに対する信頼度は、インターネットを含めてすべてのメディアにおいて低下している、と報告されている。

（2）　伊藤守を研究代表者とする共同研究で、2007年度から2009年度の文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「グローバル化におけるニュースメディア・テクスト研究の刷新」（課題番号19330118）。

（3）　筒井哲也（2015）『有害都市』（上・下）集英社。2020年の東京オリンピックに際して、メディア浄化のために表現が規制されていく状況をマンガ化の視点から描いた。しかし、1964年の東京オリンピック

に際して展開された状況の歴史を前提にすれば、筒井の描いた世界を、あながち架空のディストピアとはいえないだろう。

（4） シュッツのドン・キホーテ論自体は、わたしたちの現実やメディア的現実を考えるのに非常に示唆的である。また、ドン・キホーテの現実の理解のためには、魔法に注目する必要があるが、議論が煩雑になることもあり、シンポジウムに際しては魔法の議論は最小限にとどめた。シンポジウムを前提にしているため、この小論においても、魔法に関する部分はほとんど議論をおこなわない。しかし、ドン・キホーテの多元的現実に関して魔法は重要な位置を占めるし、メディア的現実を考えるにも大きな意味をもつだろう。とくに魔法を近代科学の枠組みで理解する様相など、メディア言説との関係も含め、非常に興味深い。これらに関しては、今後の課題として、別稿であらためて論じたい。

引用文献

池田謙一（2016）『日本人の考え方　世界の人の考え方』勁草書房

伊藤嘉高（2013）「ローカル・ノレッジはなぜ重要なのか―原発事故とリスク社会論の盲点」『都市と地域と医療の「いま」を問う～急性期医療から介護・福祉、地域コミュニティに至るまで、超高齢化の進む日本社会のあり方を考える～』http://itohiro.blog42.fc2.com/blog-entry-45.html（2018 年 1 月現在）

小田亮（2009）http://d.hatena.ne.jp/araiken/20091007/1347631508（2018 年 1 月現在）

小林義寛（2015）「遍在する、ニュースと〈個人〉――情報の「受けて / 送り手」と「公共性」――」『ニュース空間の社会学――不安と危機をめぐる現代メディア論』世界思想社、pp.37-83

舞田敏彦（2015）http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2015/10/post-4034.php（2018 年 1 月現在）

de Certeau, M.（1980=1987）*Art de Faire*,Union Generale d'Editions.（山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』国文社）

Lash,S. & Wynne,B.（eds.）, 1996, *Risk, Environment & Modernity: Towards a New Ecology*, Sage.

Schutz, A.（1964=1991）*Collected Papers 2, Studies in Social Theory*.（ブロダーセン、A. 編　渡部光他訳『A. シュッツ著作集』第 3 巻（「社会理論の研究」）マルジュ社）